

いの流水俳壇

「当季雑詠」

松尾 満津於 還

寒波来る朝ふつくらと目玉焼

間 浩太

〔評〕朝食時の目玉焼、ふつくらと焼けた、寒い朝であるだけに、温かいふつくらとした玉子の味は又格別。

はらはらというはもみじに染まりけり

中野 好子

〔評〕落葉する情景である、落葉がもみじの色に、銀杏、櫨もみじといろいろ想像できるが、主要助詞・助動詞の活用を整理すると句の据わりが良くなるように思う。

何事も手抜きの日々や木の葉髪

川村千凜子

〔評〕年を重ねて何事もままならぬ自分の体をもて余している。女は梳る櫛の歯につく髪の毛が漸く多くなつたことに驚きを覚えるものである。

紅葉や命静かに日に映えて

大川 節弥

〔評〕紅葉の命は短い、もみじすればすぐ散りはじめ、その短い期間じつと太陽の光を受けている、あたかも与えられた命をいとおしむように。

冬日和玻璃戸差す陽の柔かし

川村 愛

〔評〕冬は晴れた日が少なく風が強く、寒

さがきびしいが、その中で穏和な日があるとうれしい。陽の射し込む窓の内で繕い物でもしているのだろうか、情景の見える句である。

柚子湯して過ぎし八十路ふりかえる

筒井 文

〔評〕冬至の日、柚子の実を入れて沸かした風呂に入ると、ひび、あかぎれ、風邪ひき等に効果があるという。そんな湯にユツクリと浸って、歩んできた、わが人生をふり返っている。年輪を感じさせる句。

大根引く事に始まる冬支度

藤田 里野

〔評〕朝晩に寒さを感じる頃になると、農家はもう冬支度に入る、漬け物にする大根を引くこともその一つ。冬支度は秋の季語。

小春日や竿竹売りの声長し

川村 博子

〔評〕陰暦の十月を小春というが、現在は十一月に当たる、その頃ほかほか温かい日和が続くことがある、それをいうのである。スピーカーをつけた車で、サオヤッ…さお竹、この声には独特のひびきがある。小春日の季語がよく効いた句である。

軒下に大根暖簾ぶら下り

筒井 眉躬

〔評〕藁で吊るした干大根。冬の陽にさらされて白く乾く、まるで窓に掛けた「のれん」のように見える。

紅葉の山ながめたし里恋し

大平 種香

〔評〕作者は長期に亘つて入院生活をしている。卒寿を越えた現在でも、しっかりとした

会話もできるし、正確な筆達者でもある。いの町小川西津賀才出身であるが、腰痛と老齢で長期の療養となつている。ふる里の山、住み慣れた集落と家庭、恋しくなるのは人の常、頑張つて長生きして欲しい。

返り血の襖に染みて返り花

友草 水月

〔評〕添え書きに龍馬記念館とある。返り花は小春日に季節でもないのに咲く花をいう。明治維新当時の生々しい情景を彷彿させる句。

大空に健康二文字風が舞う

筒井 一平

音の無い日暮れゆつくり枯れてゆく腕組も寒さに耐える一手段真直に冬日を入れて糸通す神渡る橋とおぼしき冬の虹開戦日かの日の如く菜を洗う鉄骨を掴みしクレン冬ざるる霜月や袋の中で割る黒糖

霜月や袋の中で割る黒糖

井上 郁子

一点の富士一線の野菊道冬ざれの鉄橋渡る一輛車落葉踏む自問自答をくり返し吟行やもみじ落葉の続く径初霜やじゃがいもの葉こうべたれ寒月や少しおくれの帰り道逆縁の柩に置かれし寒椿雑炊や今日のひと日を恙なく家閉じて故なくさびし冬銀河

松尾満津於

松尾満津於

次 題 「当季雑詠」五句
締め切り 毎月15日

投句先

吾北教育事務所 上八川甲2010

☎ 867-2133

お礼

いの町天王南4丁目6

番地4

山崎 冬樹様から

教育支援センターに多額のご寄付をいただきました。

教育委員会学校教育課

紙上をもちまして、厚くお礼申し上げます。

